

インターバンド国際選挙監視活動に関する報告書

-2003年カンボジア総選挙国際選挙監視団の一員として参加して
感じたこと-

辻 忠博（日本大学経済学部助教授）

はじめに

この度初めて国際選挙監視団の一員として、カンボジア総選挙の選挙監視活動に参加したので、その際に気づいたこと、考えたことなどを3つの点に絞ってまとめてみたい。なお、私の配属された選挙監視チームはインターバンドの玉木さんをチームリーダーとする、通訳、運転手各1名の合計4名で構成され、カンボジア北西部に位置し、タイと国境を接するパイリン特別市を監視する任務を与えられた。

1. 暴力による選挙活動妨害に対する憤りとちぐ

はぐな野党の対応に対する疑問

何はともあれ、選挙活動に入って真っ先に気づいたことは、選挙活動に対する妨害の仕方が暴力的で、その卑劣なやり方に憤りと危険を感じたことである。しかし、それに対する野党の対応に関しても何か正直さ、緻密さを欠くような感じで疑問も感じた。

私が配置されたパイリンにおいて様々な選挙妨害が行われているようであったが、その中で次の3つの点は私が特に気がついた卑劣ないし不可解なケースである。まず、殺人事件の発生が挙げられる。過去数ヶ月の間に不可解な殺人事件が2件起きていることが、我々が選挙監視活動を始めてすぐ判明した。これらの2件のうち1件は本年5月にバイクタクシー運転手が夜、誰かに誘い出されて殺害されたものである。7月に起きた別の件もバイクタクシー運転手の殺害事件で、早朝死体が発見されたということであった。いずれの事件についても被害者は野党関係者のようであり、そのため政治的な動機が背後にあるのではないかと推測された。当局はこれらの件を単なるカネ目当ての強盗として処理し、政治的動機が引き金を引いたのではなかったと結論づけていた。なかでも、当局は5月の殺人事件について、我々パイリン国際選挙監視団は詳しく事実関係を調査し、被害者（とみられる）家を訪問し、家族にインタビューをし、その家の

息子が殺害されたことを確信したが、当局はこの件をでっち上げと断定し、殺人が行われたことすら認めていない。綿密な捜査活動をした上で結論というわけではないようであり、特定の政党の選挙活動に有利になるような操作が行われていると誤解されても仕方がないような処理がなされていることに疑念を払拭しきれなかった。



第2のケースは特定人物に対する執拗な攻撃である。選挙活動妨害に関する改善要求はいずれの野党からも出されていたが、パイリンでの監視で特に気になったのが、サムランシー党(SRP)のある活動家に対する執拗な攻撃であった。前述の、5月に起きた殺人事件は、実は、この活動家の息子が犠牲になったものであった。息子自身はバイクタクシーの運転手であり、選挙活動を実際に乗り出していたわけではないようであったが、父親は積極的な活動家であることが知られていた。その活動を封じ込めるために息子が身代わりになったようで

あった。また、投票日が数日後に迫ったある日に、この家の前庭に何者かによって手榴弾が置かれたという事件も発生した。これを発見したのは SRP 関係者であり、我々が実際にその手榴弾をみたわけではないので、真偽のほどは不明であるが、特定の野党活動家が集中的に攻撃されている様子であった。その他にも、夜中に何者かがこの活動家の家の前をうろつき、嫌がらせ、ないし、恐怖を煽る出来事もあったようである。政治的な見解の違いを選挙活動を通じて、有権者に訴え、支持を得るとというのが選挙なのであり、暴力でもって有権者や野党活動家を振り上げさせ、野党支持を思いとどまらせるというやり方に、私は非常な憤りを感じた。

このような出来事のみ注目すると野党に対する不当な弾圧としか思われないが、しかし、私は攻撃された SRP にも疑念を抱かずにはおれなかった。それは SRP の NGO 依存体質とでもいうべき態度に見出せる。野党は SRP に限らず、フンシンパック党も当局に対する強い不信感を抱いているようであったが、例えば、今回起きた 2 件の殺人事件に関して、いずれのケースも SRP の選挙活動に関連して起きた事件のようであるが、書類の不備や捜査依頼の遅れなど SRP の当局への事件究明の要望の仕方にも問題があり、当局が事件発

生自体に疑いの念を抱く「スキ」を与えることになってしまった。そのため、SRP は、当局は信頼に足る存在ではないので、より中立的な NGO、特に国際人権ないし選挙監視 NGO のプレゼンスに期待したいと述べていたが、NGO は事件の捜査をする権限を与えられていない訳であり、たとえ与党寄りであっても当局に依存せざるを得ないわけであるので、緻密に計画を練って、当局から訴えを退けられないように対応すべきであったのではないかと思うのである。国際選挙監視団は現地の組織が公平・校正に機能するのを手助けするのが使命であり、権力に対抗することはその任にあらず、あくまでも中立なのであるが、その点を良く理解していない野党関係者が少なからずいたことに我々の任務の難しさを実感した。

2. 投票所現場スタッフ、現場の選挙管理委員

会スタッフ、国内 NGO 関係者の

真剣な態度に民主主義の定着をみる



選挙運動に対する卑劣な妨害工作とは極めて対照的であるが、投票日および開票日の現場スタッフやコミュニティ・レベルの選挙管理委員会スタッフ、並びに、国内 NGO 関係者の選挙に臨む真剣な態度には、好感をおぼえ、民主主義の浸透と定着を実感した。

実のところ、数ヶ月間の投票日までの選挙運動期間中、野党に対する選挙妨害や選挙がらみとは公式には認識されていないがいくつかの殺人事件も起き、投票日にも何か起きるかもしれないという危険があった。例えば、殺人や脅迫以外に、投開票時におけるスタッフレベルでの不正や投票用紙のすり替え、投票箱の紛失・置き換えなど、最悪の状態を考えないわけではなかった。

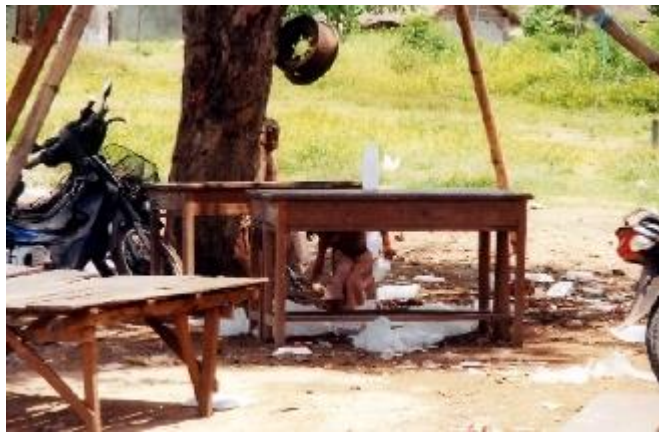
しかし、実際にはこうした事態は私が配属されたパイリンでは起きなかったようである。むしろ、私が驚かされたのは、現場スタッフおよび投票所へ派遣されている国内 NGO 監視団の非常に真剣な取り組み

であり、そこにはほとんど不正の介入の余地がないように思えたことである。投票日の投票所スタッフはあらかじめ決められた段取りにしたがって投票箱を組み立て、机を配置し、各スタッフが担うべき任務をできる限り忠実に遂行していた。投票所の中には入り口に有権者の人だかりができ、なかなか投票が進まないところもあったが、現場スタッフが間違えないよう入念に書類を照らし合わせる作業をしているためであった。投票終了後の、投票箱の封印作業についてもマニュアルに基づいて丁寧に実施され、内外の選挙監視団が納得する形で行われた。さらに、開票日も現場のスタッフは不正が起こらないよう、開票結果のカウントの間違いがないよう、個々の投票用紙を立会人や選挙監視団員にもはっきりを見せ、開票プロセスが公正に行われていることを示した。

このように、私が監視を担当した投開票所に関する限りでは、投開票に混乱はなかったし、そのプロセスで不正が介入する余地は全くなかったといえる。こうした事実をふまえると、民主主義は、まだ初期段階とはいえ、着実にカンボジアに浸透しつつあり、多くの人々が民意を政治に反映させるための民主主義的手続きの方法を理解し、尊重し始めていることが分かった。

3. 絶対的貧困の撲滅が急務

既述のように、選挙活動期間中は脅迫や殺人、票の買収のような、我々の常識に照らし合わせるとあってはならない事件や出来事があることが分かったが、それらの件数はこれまでの総選挙と比較すると格段に減少してきているとのことである。今回の総選挙の投開票に立ち会い、現場スタッフが献身的に取り組み、それを見守る政党や国内 NGO 関係者の真剣な眼差しに触れ、カンボジアにおける民主主義の定着に一種の安堵感をおぼえたのも事実である。



しかし、そうした民主主義の進展を実感することは私にとって喜ばしかった一方、ある側面についてはカンボジアの将来に対する憂慮を拭い去ることはできなかった。それは、同国の人々の生活水準の低さについてであり、ひいては、同国の経済発展の遅れに関することである。今回の短い滞在期間中にも、至るところで生活水準の低さ、生活の

貧しさを残念ながら目にすることができた。例えば、マーケットで買い物をしていると、ホームレスが自らか身体障害者であることを理由に恵みの施しを頼むために手を出してくる、あるいは、乗り込んだ車の閉まっている窓に手を出してくる物乞いもいた。また、開票所近くでは、グラウンドに捨てた弁当の容器に食べ残しが残っていないか探し回り、あればそれを口の中にほおぼったり、捨てられたミネラルウォーターの容器をくわえて水にありつこうとしている光景も目の当たりにした。その反面、ビジネスで儲けた人々や役人などの一部の人間は別荘をいくつも所有したり、高級レストランで食事をしたり、あるいは、個人用の医療施設を持っている者もいるとか、あまりに大きな貧富の格差の存在があることを実感し、その解決が急務であるとの思いをもった。

では、いかにしてカンボジアの経済発展を始動させることができるのか。これは、非常に難しい問題である。というのも、経済活動が始動し、軌道に乗るためには様々な前提条件が成立していることが必要だからである。それらの前提条件とはいろいろあり、資金や技術などはもちろん重要な要素であるが、それ以外にも基本的な要素がある。それはインフラの整備である。道路や橋、港湾施設、水道、電気、電話などがこれにあたるが、カンボジアでは首都でさえこれらのイ

ソfraを十分に備えているとはいえないであろう。首都プノンペンから少し離れると、道路はすぐに未舗装になるし、鉄道網は整備されていないどころか最も危険な交通機関として見なされているほどである。このような現状で、果たしていつからカンボジアはダイナミックな経済発展の段階に入れるのか、人々の生活は近い将来豊かになるのか、現段階では全く見通しが見つからないのである。

政治的な進歩は必要である。しかし、それだけでは国は物質的には豊かにならない。いかにして、経済発展を始動し、軌道に乗せ、人々を貧困から解放するか、今後、最も重要な課題として取り上げるべきではないかと思った。

おわりに

10日程度の短い選挙監視活動であったが、その経験から得られた意義は極めて大きなものがあった。それは一国の民主化の進展に確実に貢献することができたということのみからいえることではない。カンボジアとの関わりは今回だけで終わりにするのではなく、今後も続けていきたいと考えるようになってきたからである。しかし、その関わりは今回のような政治的な進歩という点ではなく、人々の暮らしを経済的

に良くするという点において行いたいと思っている。いかなる形で関わ
っていくのかはまだ分からないが、今後、カンボジアと気の長いつきあ
いをする事になりそうである。

[▲ Page Top](#)